

ロシア最大の少数民族タタール人

2783

北京五輪で優勝したサミトワ=ガルキナ選手はロシア国旗(左)とタタールスタン共和国旗を振りかざした Photo: Getty Images/アフロ

2つの旗でウイニングラン

今年8月に開催された北京オリンピックで、私の印象に残ったシーンの1つに、陸上女子3,000m障害のレース後の場面があった。オリンピックで初めて行わたったというこの種目で、ロシアのグリナラ・サミトワ=ガルキナという選手が世界新記録で優勝した(グリナラが名、サミトワ=ガルキナが姓である)。レースが終わると、サミトワ=ガルキナは、スタンドからロシア国旗を受け取り、ウイニングランを始めた。ここまででは、よくある光景だ。ところが、サミトワ=ガルキナはスタンドから、ロシア国旗とは別の、縁っぽい色のもう1つの旗を受け取り、それも誇らしげに掲げてみせたのである。

私は即座に、「そうか、彼女はロシア国民ではあるけれど、ロシアのなかの少数民族共和国の出身で、その共和国の旗を掲げているのだな」と理解した。しかし、不勉強なことに、その縁っぽい色の旗が、具体的にどこの共和国の旗なのかは、知らなかった。

すぐに調べてみたところ、彼女はロシア沿ヴォルガ地域のタタールスタン



共和国の出身であることが判明した。なるほど、あれはタタールスタンの旗だったのかと、合点が行った次第である。言われてみれば、グリナラ・サミトワ=ガルキナというエキゾチックな名前は、いかにもタタール人っぽい。

それにしても、オリンピックのウイニングランで、国旗の他にもう1つの旗が掲げられるシーンというのは、ちょっと記憶がない。もし仮に、中国代表としてオリンピックに出場したチベット人の選手が、チベットの旗をはためかせてウイニングランをしたらどうなるか。間違いなく、大騒動に発展するだろう。その点、サミトワ=ガルキナ選手の勝利のパフォーマンスは、ロシア国内で物議を醸したりしないのだろうか？

この一件が気になり、当世タタール人およびタタールスタン共和国事情について少し調べてみたので、今回はこれについて語ってみたい。

最大の少数民族

「タタール人」と呼ばれる人々は、ユーラシアの広大な領域に、いくつかの集団に分かれて分布している。ここでは、最大勢力であるヴォルガ川中流域のタタール人について主に考察することにする。タタール人は、チュルク語系の言語を話し、主にイスラム教スンニ派を信仰する民族である。ただし、現代ではロシア語に移行している人が多いし、イスラム色もそれほど濃いわけではない。周辺の諸民族との通婚が進んでおり、外見的にはアジア人からは程遠く、ロシア人とほとんど見分けがつかない。

今日のロシア連邦において、タタール人はロシア人に次ぐ人口数を誇り、最大の少数民族となっている。すなわち、2002年の国勢調査によれば、自らを「タタール人」と申告した国民は555万人であり、これは国民全体の3.8%に相当した。

また、タタール人を主体とするタタールスタン共和国は、ロシアで最も重要な民族共和国と言っていい。ロシアには少数民族の共和国が21設けられているが、人口が最も多いのが377万人のタタールスタンである。経済力も強力であり、とくに共和国内で産出される石油を利用した石油化学工業は、ロシア屈指の規模を誇る。また、ナベレジヌイチエルヌイ市には（サミトワ=ガルキナ選手は同市の出身）、大型トラックで有名な「カマ自動車工場」もある。シャイミエフ現大統領は、これらの強力な産業基盤をコントロールしつつ、ソ連時代からこの共和国に君臨している重鎮である。タタールスタン共和国の首都カザン市は、ヴォルガ川に面する百万都市であり、



2005年に市創設1,000周年が華々しく祝われたことは記憶に新しい。

実は、タタールスタン共和国の人口377万人に占めるタタール人の比率は、52.9%にすぎない（他はロシア人等）。逆に言えば、共和国の外に住んでいるタタール人が、非常に多いということである。実際、モスクワの官庁や大企業で面談した相手が、実はタタール人だったというようなケースも、よくある。タタール人は商才に長けていると言われ、ロシア人の間では「タタール人は狡猾で信用できない」という悪評も聞かれるようだ。

● 文字論争

タタール人固有の言語であるタタール語は、その昔はアラビア文字で表記されていたが、ロシア革命後の1927年にローマ字を採用した。さらに、1939年には、ロシア語などと同じキリル文字に移行し（ただし、ロシア語にはない特殊文字をいくつか使用），ソ連時代はそれがずっと続いた。

しかし、1990年代に入ると、タタール・ナショナリズムの高まりを背景に、ローマ字復活運動が台頭した。1999年に共和国議会は、ローマ字復活を制定した法律を可決する。これにより、2000年から2011年にかけて、タタール語の表記をキリル文字からローマ字に段階的に切り換えていくことになった。

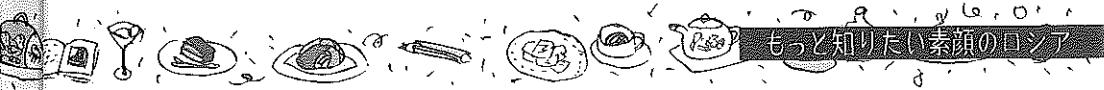
これを問題視したのが、連邦中央である。2002年にロシア連邦議会は、各共和国の国家言語を表記するアルファベットは、キリル文字をもとにしたものでなければならない旨を定めた連邦法を制定する。明らかに、タタール語のローマ字化に神経を尖らせた末の立法だった。2004年にロシア連邦憲法裁判所も、本件の決定権は連邦当局にあるという判断を下し、タタール語のローマ字化に待ったをかけた。

これを受け、タタールスタン側は、ひとまずローマ字化の政策を取り下げた。しかし、将来この問題が再燃する可能性も、ないとは言い切れない。

● タタールスタンの位置付け

さて、冒頭で紹介したサミトワ＝ガルキナ選手の勝利のパフォーマンスは、ロシア国内では物議を醸さなかったのだろうか？

私がざっと調べたところ、サミトワ＝ガルキナがタタールスタン共和国旗を掲げてみせたことについて、ロシアでは、反響らしい反響はほとんどなかったようである。試合後のインタビューでも、「世界新記録はねらってい



たか？」といったやりとりに終始している。つまり、彼女の行為はごく自然で、ロシアの人々に特別な違和感を抱かせなかったということのようだ。ネット書き込みの類を見ても、非難めいたコメントは見当たらず、逆に「タタールスタンの旗も掲げてくれて、ありがとう！」といった感謝の言葉が散見された（当然、タタールスタン共和国民、またはタタール系住民による書き込みであろう）。

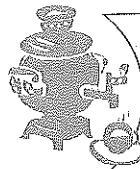
思うに、ロシア人にとってタタール人はあまりにも身近で、「異民族」という感覚があまり湧かないのではないだろうか。確かに、ソ連崩壊直後、シャイミエフ大統領率いるタタールスタン共和国が、ロシアからの分離をちらつかせたことはある。当時のエリツィン政権は、タタールスタンに広範な自主権を与え、やっとの思いで連邦につなぎ止めた。上述のローマ字化の是非をめぐる論争も、デリケートな問題だ。

しかし、全体として見れば、タタール人は深く広くロシア社会に浸透し、その欠くべからざる一部となっている。しかも、サミトワニガルキナはロシア国旗とタタールスタン共和国旗とともに掲げ、その両方への忠誠心を示している。それゆえに、彼女はタタールスタンにとってと同じくらいに、ロシア全体にとってもヒロインになれるのであろう。

スポーツ大国を支える共和国

ところで、北京オリンピックには、陸上、バレーボール、射撃を中心に、タタールスタンの選手が14人も参加していたそうだ。また、同共和国にとって今回の金メダルは、1976年のモントリオール、1992年のバルセロナに続くものであり、どうやらタタールスタンには16年に1度、金メダルが巡ってくるというジンクスがあるらしい。もっとも、シャイミエフ大統領は、「これからは4年ごとに金メダルが欲しい」と贅沢なことを言っているそうだが。

2013年のユニバーシアードのカザン開催が決まったこともあり、今後タタールスタン政府はスポーツの強化により一層力を入れるようになるだろう。タタールスタンはスポーツ大国ロシアのなかでも、中心地の1つになっていく可能性が高い。



ロシアNIS貿易会とは？ロシアNIS貿易会は、日本とロシア・NIS諸国との経済関係を促進するために活動している団体です（NISとは、旧ソ連から独立したウクライナ、中央アジアなどの新興独立国を指します）。このコーナーでは、ロシア地域のスペシャリストである同会のスタッフが持ち回りで、バラエティ豊かなエッセイをお届けいたします（同会につき詳しくは、<http://www.rotobo.or.jp>）。